

# 光明真言土沙勸信記における声調変化について

——呉音去声字の上声化についての考察——

榎 木 久 薫

## 目次

はじめに

一、資料について

二、一音節字に対する差声

三、上・去・入軽声字の後の二音節去声字

四、語頭か平声・入声字の後の二音節上声字

まとめ

## はじめに

筆者は、大東急記念文庫蔵『光明真言土沙勸信記』の声点について、片仮名文における漢字音の性格を明らかにするという観点から考察を進めているが、本致では特に呉音去声字の上声化の事象に焦点を当てて考察したところを述べたいと思う。

大東急記念文庫蔵『光明真言土沙勸信記』は後に示したように、在家の者を対象として著述されたものと考えられる。本文の書写及び漢字に対する振仮名・声点を加えた者が誰なのかは識語等からは明らかでないが、恐らく明恵自身か近

侍の門弟であろうと考えられる。このことから、本資料の声点は、明恵を中心とした高山寺教学での片仮名文における漢字声調に対する認識、資料に即して言い換えるならば、在家の者に示して理解させることが可能な漢字声調と考えたものの姿を示すものと考えられる。

本資料のこのような性格からして、その漢字声調の性格を明らかにしてゆくためには、声調の全体像を明らかにすることとともに、高山寺教学におけるより学問的な場での声調と対比させてみるのが有効な方法と考えられる。そこで本致では、『光明真言土沙勸信記』とほぼ同時期に高山寺で書写された『新訳華嚴經音義』『貞元華嚴經音義』と対照しつつ考察を進めることとした。

## 一、資料について

### 1、『光明真言土沙勸信記』

『光明真言土沙勸信記』は明恵上人の撰に係る資料である。現在は巻上と別記が大東急記念文庫に蔵されている<sup>(1)</sup>。また、次に示すように、別記末尾の識語、別記巻末の記述、及び『高山寺明恵上人行状』<sup>(2)</sup>の記述によって、その著述事情・著述意図も知られる。

### 『光明真言土沙勸信記』

#### (別記識語)

安貞二年極月廿六日午時／於高山寺禪堂院草菴記之了

#### (別記巻末の記述) 別65

コノ記三卷ノナカニハ・タ、在家ノ信ヲス、ムルアヒタ・假字ニテ・土沙ノ功能ヲ・アラハス・ハカリナリ

『高山寺明恵上人行状(仮名行状)』(下巻三八丁オモテ)

光明真言土沙勸信記における声調変化について

一嘉祿三年丁亥五月十六日、光明眞言ノ土沙義ヲ撰ス、其後安貞二年九月ノ比ヨリ光明眞言ノ法ニヨテ土沙加持アリカノ土沙ノ間ノ功能并得益勝利ノ委細ハ、同勸信記上下二卷并別記一卷ヲ作テコレヲ注サレタリ、

本資料の表記は、字音語は一例を除いてすべて漢字表記され、一方和語はいわゆる訓漢字のうちでもっとも基本的なもの以外は片仮名表記される、いわゆる漢字交り片仮名文である。

本資料の片仮名振仮名・声点は、本文の表記様式がこのように漢字交り片仮名文であることから、字音に関するものが中心となっている。本資料については、既に詳しく述べているので、声点についてのみ略述すると、声点は字音振仮名が附された漢字に多く差声されている。逆に字音振仮名が附されていない漢字に声点のみが差声された例はごく僅かである。字音振仮名のみで声点の差声されていない漢字も多くある。これらの声点は朱筆・墨筆による片仮名振仮名が加えられたのと同時期に、同一人物によって加えられたとするのが妥当であろう。

本資料は鎌倉初期、明恵を中心とした高山寺教学の下で作成されたものであって、全体として明恵を中心とした言語圏における片仮名文の性格を考察するために有効な資料と考えられる。

## 2、 『新訳華嚴經音義』 『貞元華嚴經音義』

『新訳華嚴經音義』 『貞元華嚴經音義』は次に示したように、『光明眞言土沙勸信記』とほぼ同時期に高山寺で書写された資料である。<sup>(4)</sup>

### 『新譯華嚴經音義』

(本奥書)

嘉祿三年丁亥六月二日西於西山／梅尾之禪房集兩三本之音義／抄寫之偏為自行轉讀敢不／可及外見矣／

花嚴宗沙門喜海

(追筆)

交<sub>レ</sub>了

(別筆)

寛喜元年八月十八日与／五六輩交合再治了／寛喜元年八月七日魁子點并假名數度〇交檢畢

(裏表紙内)

安貞二年四月廿四日於高山寺草室書寫了

『貞元華嚴經音義』

(奥書)

安貞二年四月廿六日書寫畢／校畢

『新訳華嚴經音義』は識語にあるように喜海が自行転読のために編纂したものであつて、その字音仮名音形および声点  
は、沼本克明氏の指摘によれば、喜海の理解していた伝承吳音を中心として若干の反切による知識音を含むものと考え  
られる。一方『貞元華嚴經音義』は識語からは成立事情は明らかでないが、書写が同時期である事から『新訳華嚴經音  
義』と同様明恵を中心とした高山寺教学での学問的な場での漢字音認識を反映するものと考えられる。

## 二、一音節字に対する差声

吳音去声字の上声化の事象は、漢字音の国語音化の事象の一つとして取り上げられるものである。このような事象に  
ついて、片仮名文である『光明真言土沙勸信記』と、華嚴經の字音直読に基づく音義資料である『新訳華嚴經音義』『貞  
元華嚴經音義』とを比較することによって、明恵を中心とした高山寺教学において、在家の者が理解できると考えた漢  
字声調（一般的な漢字使用の場での漢字声調）の性格を知る手掛りが得られるものと考ええる。

本致で取り上げた三資料における上声点・去声点差声字を、その音節数と前接字の声点の違いによって分類して用例

数を示したものが〈表1・表2〉である。これらの表によって指摘できる事を以下に述べたいと思う。

表1 光明真言土沙勤信記

前接字 音節数	語頭	平	上	去	入	平軽	入軽	不明
	一	24	2	4	5	1	2	
二	7	1	8	7			1	

表2 新訳華嚴經音義・貞元華嚴經音義

前接字 音節数	語頭	平	上	去	入	平軽	入軽	不明
	一							
二	35	14						11

前接字 音節数	語頭	平	上	去	入	平軽	入軽
	一	新	274	75	48	49	36
貞		113	32	14	23	10	
二	新	29	8	32	47	5	
	貞	16	2	7	20	2	

前接字 音節数	語頭	平	上	去	入	平軽	入軽
	一	新					
貞		1					
二	新	323	82	6	5	37	1
	貞	173	40	8	2	9	2

上声字  
去声字  
(数値はすべて延べ用例数を示す)

まず第一に、一音節去声字が三資料を通じて『貞元華嚴經音義』に一例しか見られない事である。

(用例の上の数字は用例番号、本例以降の数字のない用例は参考例である)

この例(用例1)を見ると、「ハ」は墨筆「ハン」の朱訂であつて、墨筆「ハン」の読みをとれば、二音節去声字ということになる。他に一音節去声字の例が見られない事から、この例は訂正が声点にまで及ばなかつたために生じたものと考えられる。このように、『光明真言土沙勸信記』『新訳華嚴經音義』『貞元華嚴經音義』ともに原則として一音節の去声字はないと言ふ事が出来る。これは、曲調アクセントを避けるといふ漢字音の国語化の音韻変化の事象の反映として説明される。

その過程については、佐々木勇氏に論攷があるが、その中で本放で取上げた資料とほぼ同時期に書写された親鸞筆『観無量寿經』における一音節去声字の上声化について整理されたものと比較すると大きな違いがあることが分る。佐々木氏は『観無量寿經』では、上声・去声両点差声字では、上声差声例は句頭で2字3例・句中で52字284例、去声差声例は句頭で42字102例・句中で33字64例(例外二例を除く全例が語頭)、上声点のみ差声字は14字30例(句頭か句中でも語頭)、去声点のみ差声字は57字94例(句中例のみ)であること、また句中字は上接字去声の場合上声化しやすいことを指摘しておられる。佐々木氏は更に、院政期以前の資料である聖衆来迎寺蔵『妙法蓮華經』・保延本『法華經单字』・承暦本『金光明最勝王經音義』についても同様の調査をされて、時代が下るに従つて句頭の上声点差例が見られるようになること・句中でかつ語中の上声点加例も増加することを指摘しておられる。

この様に、『観無量寿經』における呉音一音節子に対する上声点差声の状況は、この音韻変化の現象の鎌倉初期の状態をそのまま示していることと見ることが出来る。『観無量寿經』には奥書がないが、建仁から元久頃の成立と考えられている。これに対し、本放で取上げた資料は前述の通り、いずれも奥書に安貞二年の書写であることが記されている。建仁から安貞までの三十年程の間に音韻変化の現象として条件によつては去声のままである場合もあつた状態から、すべて上声

になるといふ変化を遂げたとは考え難く、本放で取り上げた資料における一音節字に対する一貫した上声点の差声は、何等かの規範意識をもつて統一的行われたものと考えられるのである。

その規範意識が具体的にどのようなものであつたかについては、今のところ明恵を中心とした高山寺教学において直接言及した記述を見出していないため明らかにし得ないが、本資料の一音節字に対する上声点・去声点差声の状態から推し量るならば、『補忘記』の次の記述に基づいて沼木氏が指摘しておられるような規範であつたと考えられる。

且又一字仮名字<sup>ニハルヒ</sup>不<sup>レ</sup>用<sup>ヒ</sup>去<sup>声</sup>也故一字仮名去<sup>声</sup>字<sup>ヲハ</sup>上<sup>声</sup>用<sup>来</sup>也但真言陀羅尼梵語梵<sup>字</sup>等<sup>字</sup>字<sup>ハ</sup>任<sup>指</sup>是<sup>レ</sup>習<sup>ヒ</sup>故去<sup>声</sup>去<sup>声</sup>連<sup>続</sup>及<sup>ヒ</sup>一字仮名去<sup>声</sup>不<sup>レ</sup>簡<sup>レ</sup>之<sup>也</sup>（貞享版・卷下）〈中略〉つまり単字声調の範疇では去声に属するものの中で、一音節のものが具体的な調値として上声で現れるのだという把握がなされていたと考えられるのである。

なお、ここで沼木氏の言われる「単字声調」とは実際の読誦においては発現しない知識としての声調（知識声調）であり、「具体的な調値」とは、実際の読誦において発現する声調（読誦声調）であると考えられる。読誦声調の中には、知識声調としての一音節去声字のように、漢字それ一字（単字）で発音しても上声になるものと、二音節去声字のように、単字としては去声であつてそれがあがる字音連続（単語）の中で条件によつて声調が変るものがあると考えられる。

### 三、上・去・入軽声字の後の二音節去声字

つぎに指摘したい事は、『光明真言土沙勸信記』には前接字上声・去声及び入声軽の後には二音節去声字が出現せず、一方『新訳華嚴経音義』『貞元華嚴経音義』にはこのような用例が見られる事である。

a、前接上声

名 2 匪<sup>(上)</sup>名<sup>(去)</sup>□ヤウ

新1オ7

名<sup>(去)</sup>ミヤウ聞<sup>(上)</sup>モン

新4ウ3

名(去)ミヤウ刺(上)シ

新 9才 6

名(去)ミヤウ響(平)ヨ

新 24才 7

3 偉(上)井哉(去)邁(去)サイ

新 14ウ 1

4 窄(上)ラウ峻(去)シユン

思俊反

貞 12才 6

高(去)カウ峻(平)シユン

雖聞反

新 42才 1

崇(平)ソウ峻(去)シユン

雖聞反

新 43才 2

高(去)コウ峻(平)シユン

思俊反

貞 6才 1

崇(平)ソウ峻(去)シユン

思俊反

貞 9才 1

峻(平)ソウ峻(去)シユン

思俊反

貞 9才 1

峻(去)シユン時(上)チ

思俊反

貞 16才 5

嶮(平)ケム峻(去)シユン

思俊反

貞 17才 4

5 枯(上)コ槁(去)カウ

下音考

新 46ウ 7

6 枯(上)コ槁(去)カウ

苦老反

貞 18ウ 3

7 兕(上)ク殘(去)邁(去)サン

貞 13ウ 6

8 虛(上)コ矯(去)ケウ

居夭反

新 36ウ 5

不(上)フ矯(上)ケウ

居夭反

新 12才 5

爲(上)キ竿(上)カン

下音干

新 18才 5・新 22才 1

其(上)邁(去)竿(上)カン

下音干

新 42ウ 4

9 其(上)邁(去)竿(去)カン

公安反

貞 20ウ 7

光明真言土沙勤信記における声調変化について

脛 10 之(上)シ脛(去)キヤウ 胡定反

蚘 11 獸(上)シユ蚘(去)クワン 魚哀反

該 12 遐(上)カ該(去)カイ 古哀反

該(去)カイ練(平)レン 古哀反

貌 13 妍(上)メウ貌(去)メウ

貌(去)メウ恭(上)ク 茅教反

高 14 憑(上)ヘウ高(去)カウ

高(去)カウ低(平)テイ

高(去)カウ峻(平)シュン

高(去)カウ倨(上)コ

高(去)カウ壘(平)ルイ(下ニ壘)

麗 15 巨(上)コ麗(去)レイ 郎計反

崇(上)シユ麗(平)レイ 郎計反

妹(上)シユ麗(平)レイ

精(去)シヤウ麗(去)レイ 郎計反

b、前接字去声

幹 16 聳(去)シユウ幹(去)カン 哥旦反

爲(上)キ幹(上)カン 古旦反

擢(入)タク幹(去)カン 古案反

貞 9 ウ 5

貞 17 ウ 2

新 2 ウ 3

新 52 ウ 3

貞 10 ウ 6

貞 21 オ 4

貞 13 オ 4

新 15 オ 4

新 42 オ 1・貞 6 オ 1

新 46 オ 5

貞 13 オ 6

新 21 オ 7

新 8 ウ 2

新 16 オ 7

新 20 オ 4

貞 16 ウ 4

新 2 ウ 7

新 3 オ 6

寶(平)ホウ幹(去)カン 古且反

新25ウ1

枝(上)シ幹(上)カン 古且反

新38才4

其(上濁)コ幹(上濁)カン 古且反

新46才4

璃(上)リ幹(上)カン 古且反

新48才3

肝 17腎(去)シン肝(去)カン 下音十

新20ウ4

肝(去)カン肺(平)ハイ

新23才5・新47ウ2

肝(去)カン肺(平)ハイ 圍寒反

貞18ウ6

肝(去)カン膽(平)タム 居寒反

貞20才5

賢 18腸(去)チャウ腎(去)シン 時忍反

新23才4

19心(去)シム腎(去)シン 時忍反

新48ウ2

20心(去)シム腎(去)シン 是忍反

貞18ウ6

腎(去)シン肝(去)カン 時忍反

新20ウ4

身 21粉(去)コ身(去)シン

新49才1

身(去)シン嬰(上)ヤウ

新17才6

輟(入)テツ身(去)シン

新23才2

循(平濁)シュン身(去)シン

新27才4

楔(入濁)セツ身(去)シン 郎計反

新54才6

麗 22精(去)シヤウ麗(去)レイ 郎計反

新20才4

巨(上)コ麗(去)レイ 郎計反

新21才7

光明真言土沙勸信記における声調変化について

鎌倉時代語研究

崇(上) シュ麗(平) レイ 郎計反

姝(上) シュ麗(平) レイ

新 8ウ 2  
新 16オ 7

c、前接字入声軽

低 23 韃(入輕濁カ)ヘッ低(去) テイ 丁泥反

貞 9オ 7

高(去) カウ低(平) テイ 丁泥反

新 15オ 4

低(去) テイ影(平) ヤウ 丁泥反

新 37ウ 7

低(去) テイ下(平濁) ケ 丁泥反

新 53オ 3

心 24 革(入輕カ)心(去) □ム

貞 9ウ 7

心(去) シム肺(平) ハイ

新 17ウ 4

浣(平) クワン心(去) シム

新 41オ 3

耐(去) ナイ心(上) シム

新 41オ 7

心(去) シム腎(去) シン

新 47ウ 2・貞 18ウ 6

惟 25 朔(入輕)サク惟(去) ユイ

新 2オ 6

緬(平) メン惟(去) ユイ

新 2オ 3

惟(去) ユイ付(平濁) シュン

新 33オ 4

前接字上声・去声・入声軽の後に二音節去声字が出現するということは、連続した場合中低型アクセントとなるとい  
うことである。中低型アクセントは日本語のアクセントとしては不自然なアクセントということになる。このようなア  
クセントが『新訳華嚴經音義』『貞元華嚴經音義』に見られ『光明真言土沙勸信記』に見られないことについては、どの  
ように考えればよいであろうか。

『新訳華嚴經音義』『貞元華嚴經音義』で、語アクセントとして中低型アクセントを認めていたかという点については、次のように考える。まず、用例数としては、上・去・入軽声字の後の二音節字には、去声字より上声字の方が、多いということである。また、同じ字が同じ条件下で上声に差声されている例がある(「嬌」「竿」「幹」「心」の参考例)。さらに「竿」には同一漢字の連続「其竿」が『新訳華嚴經音義』では上声であり(参考例)、『貞元華嚴經音義』では去声である(用例9)例がある。このような諸例から見て、『新訳華嚴經音義』『貞元華嚴經音義』においても中低型アクセントは不安定なものだったと考えられる。つまり中低型アクセントが、語アクセントとして安定的に存在しているのではなく、これらの中低型アクセント形を示す用例は、日本語の単語としての熟合度が低く、単字声調のまま、連続されたものと考えられるのである。

一方、『光明真言土沙勸信記』は片仮名文であり、また「在家ノ信ヲス、ムル」という著述意図からしても、そこに見られる漢字の連続は日本語の単語として据えられていたと考えられるから、日本語のアクセントとしても不自然な前接字上声・去声・入声軽の後の二音節去声字は上声化した形で示されたものと考えられる。

このように前接字上声・去声・入声軽の後の二音節去声字について、『光明真言土沙勸信記』と『新訳華嚴經音義』『貞元華嚴經音義』とで出現の有無の相違があるのは、呉音二音節去声字の上声化現象に関して両資料の間に質的相違があるのではなく、それぞれの資料における漢字の連続に日本語の語として熟合度の低いものが含まれているか否かの違いによると考えられるのである。

#### 四、語頭か平声・入声字の後の二音節上声字

次に指摘したい事は、『光明真言土沙勸信記』『新訳華嚴經音義』『貞元華嚴經音義』ともに語頭か前接字平声・入声の後に二音節上声字が見られる事である。

『光明真言土沙勸信記』

a、語頭

眼 26 眼(上濁)前(平濁)ノ

得眼(平濁)林(上濁)ト

銀 27 金(去)・銀(上濁)・吠(平濁)瑠璃(上濁)・

講 28 講(上)讚(平)セシメテ・

青 29 青(上)丘(平輕)大師ト・

30 青(上)丘(平輕)大師ノ・

談 31 談(上濁)セリ・

同 32 同(上濁)ス・

展(平)轉(平濁)同(去濁)説(入)スルハ・

同(去濁)躰(平)ノ

b、前接字平声

狀 33 奏(平)狀(上濁)ノコトクニ・

『新訳華嚴經音義』『貞元華嚴經音義』

a、語頭

仰 34 仰(上濁)キヤウ視(平)シ 魚掌反

俯(平)フ仰(上濁)キヤウ

鑽(去)サン仰(上濁)キヤウ

貞 8 ウ 4  
新 15 オ 2  
新 15 ウ 2

上 089  
上 636  
上 216  
上 169  
上 138  
上 134  
上 041  
上 082  
上 122  
上 240  
上 181



鎌倉時代語研究

49海(上)カイ島(平)タウ

踰(平)ユ海(上)カイ

漂 50漂(上)ハウ淪(平)リン

疋苗反

51漂(上)ハウ溺(入)ニヤク

撫昭反

52漂(上)ハウ汨(入)コツ

53漂(上)ハウ泊(入)ヒヤク

澡 54澡(上)サウ瓶(上)ヒヤウ

澡(去)サウ瓶(上)ヒヤウ

澡(去)サウ漱(上)ソ

爪 55爪(上)サウ甲(入)カフ

牀 56牀(上)シャウ褥(入)ニク

牢 57牀(上)シャウ榻(平)タク

牢 58牢(上)ラウ獄(入)コク

犬 59牢(上)ラウ峻(去)シユン

犬 60犬(上)ケン豚(平)トン

瘡 61瘡(上)セン愈(平)ユ

62瘡(上)セン 七縁反

瘡 63瘡(上)サウ疣(上)ウ

64瘡(上)サウ疱(平)ハウ

新54才5

新1ウ4

新4ウ2

新10ウ1

新53ウ3

貞23ウ2

新41才3

貞4才4

新19ウ6

新23ウ1

新24才4

新47才7・貞18ウ5

新22才3

貞12才6

新48才2

新52才7

貞22才7

新37才1

新54ウ2

65 瘡 (上) サウ 疣 (上) ウ 楚羊反

癰 (去) キヨウ 瘡 (上) サウ 楚良反

省 66 省 (上) シヤウ 方 (去) ハウ 思井反

67 省 (上) シヤウ 躬 (上) 邁ク 恩井反

減 (去) 邁ク ム 省 (上) シヤウ 九救反

祐 68 祐 (上) イウ 助 (平) 邁シヨ 于救反

良 (平) リヤウ 祐 (去) イウ 巨堯反

翹 69 翹 (上) ケウ 足 (入) ソク 巨堯反

翹 (平) ケウ 立 (入) リフ 与久反

誘 70 誘 (上) イウ 誨 (平) クエ 上音酉

71 誘 (上) イウ 誨 (平) クエ 余手反

72 誘 (上) イウ 誨 (平) クエ 与久反

化 (平) クエ 誘 (上) イウ 上音靈

鈴 73 鈴 (上) レイ 鐸 (入) チャク 普照反

74 鈴 (上) レイ 鐸 (入) チャク 普照反

飄 75 飄 (上) ヘウ 繫 (入) キヤク 普照反

b、前接字平声

仰 76 俯 (平) フ 仰 (上) 邁 キヤウ

鑽 (去) サン 仰 (上) 邁 キヤウ

光明真言土沙勤信記における声調変化について

貞 2 ウ 5

新 9 才 7

貞 11 才 3

貞 11 才 4

貞 10 ウ 4

貞 18 才 4

貞 23 才 5

新 13 才 1

貞 13 ウ 7

新 21 才 3

新 36 ウ 5

貞 4 才 1

新 4 才 2

新 5 ウ 3

新 5 ウ 3

新 3 ウ 2

新 15 才 2

新 15 ウ 2

新 25 才 6

覲 (平) キン仰 (平濁) カウ

新23ウ7

仰 (上濁) キヤウ視 (平) シ 魚掌反

貞8ウ4

牆 (平) クワン牆 (上) シヤウ

新7才3

78垣 (平) クワン  
エン(朱) 牆 (上) シヤウ

新41才7

拱 (平) サン拱 (上濁) クキョウ

渠恭反

貞16才6

檻 (平) ロウ檻 (上濁) ケム

胡減反

新19才5・新26ウ7

軒 (去) カン檻 (上濁) ケム

新19ウ4

軒 (去) カン檻 (上濁) ケム 胡減反

新25才4

軒 (去) カン檻 (上) ケム(シ)ニ重書

胡減反

新39才4

軒 (去) カン檻 (上濁) ケム 胡減反

新43ウ4・貞15ウ5

軒 (去) カン檻 (上濁) ケムナ<sup>33</sup>

貞1才5

海 81踰 (平) ユ海 (上) カイ

新1ウ4

海 (上) カイ蚌 (平) ハウ

新8才4

海 (上) カイ島 (平) タウ

新54才5

牆 82垣 (平) クワン牆 (上) シヤウ 疾羊反

貞2ウ1

誘 83化 (平) クエ誘 (上) イウ 与久反

新4才2

誘 (上) イウ誨 (平) クエ 与久反

新21才3

誘 (上) イウ誨 (平) クエ 上音酉

新36ウ5

誘 (上) イウ誨 (平) クエ 余手友

貞4才1

掌 84 盃 (平) クワン 掌 (上) シヤウ

C、前接字入声

井 85 汲 (入) キフ 井 (上) シヤウ

減 86 歇 (入) カツ 減 (上) ケム

減 (去) ケム 省 (上) シヤウ

香 87 馨 (入) ユツ 香 (上) カウ

88 馨 (入) ユツ 香 (上) カウ

香 (去) カウ 篋 (入) ケフ

髓 89 骨 (入) コツ 髓 (上) スイ 息委反

新 20 ウ 3 ・ 新 35 オ 2

貞 9 オ 2 ・ 貞 16 オ 6

新 53 ウ 5

新 11 ウ 4

新 12 オ 2

新 18 オ 4

貞 10 ウ 4

新 14 オ 4

この様な例は、当該字の単字声調が正しく認識され、それが実際の読誦での字音連続において如何なる条件下で上声化するかについての法則が正しく理解され、それに基づいて声調を定めて行く限り生ずるはずのない例である。

前接字平声・入声の後に二音節上声字が出現することを促す理由については、佐々木勇氏が主に『観無量寿経註』『阿弥陀経註』の用例に基づいて、韻尾に〔m〕〔n〕〔u〕を持つ字が句中・語中では一音節相当と看做され、一音節去声字を避けるという理由によつて上声化したと述べておられる。しかし、『観無量寿経註』『阿弥陀経註』には同じ条件にある漢字が去声である例も見られる。また『光明真言土沙勸信記』『新訳華嚴経音義』『貞元華嚴経音義』には語頭に二音節上声字が出現する例が多数ある。語頭の二音節上声字は音韻的条件によつて上声化したとは考え難い。つまり、佐々木氏の指摘された理由以外にも語頭か前接字平声・入声の後に二音節上声字が見られる理由があると考えられるのである。

ここでより普遍的な理由を想定すると、次のようなことが考えられる。単字声調としては去声である二音節の或る漢

字を含み、その漢字が前接字上声・去声の後に来る事によって上声化した単語が多数あるか、そのような単語のいくつかが頻用されると、その漢字の本来の単字声調が上声であったと誤認され、語頭や前接字平声・入声の後に上声で出現する事になるという理由である。

このような過程を経て、語頭の二音節字に上声点が差声されたとするならば、それはこの時点において単字としての呉音の声調体系が平・上・去・入の四声体系であったことを想定することになる。ただ、この単字声調としての四声体系が読誦声調の範囲内の事なのか、知識声調までを含んだ事なのか、またこのような声調体系がどのような場で、どのような形で存在したかは今明らかに行うことができない。

ところで、誤認された形であっても、単字声調に対する意識がある限り、音韻的条件で上声化することのないと考えられる語頭あるいは前接字平声・入声の後においては、その漢字はすべて上声で出現する事になる。ところが、『光明真言上沙勸信記』『新訳華嚴経音義』『貞元華嚴経音義』ともに、同一漢字が同じく語頭あるいは前接字平声・入声の後に位置しながら、ある単語では上声、別の単語では去声の形で出現するものがある。『光明真言上沙勸信記』では用例の内「眼」「同」(用例26・32)がこれにあたる。『新訳華嚴経音義』『貞元華嚴経音義』は「倉・澡・祐・滅・香」(用例35・54・68・86・87・88)がこれにあたる。これらの用例の内『光明真言上沙勸信記』『眼』(用例26)『貞元華嚴経音義』『祐』(参考例)は漢音読語と考えられるが、それ以外は呉音読語と看做される。二音節去声字の上声化においてこのような現象が起るプロセスについては今考えを持っていないが、一時点ある個人の意識としてこのようなことが許容されるのは、単字声調としての一貫性よりも個々の単語として固定した声調を重視したためと考えられる。

## ま と め

以上の三点から、片仮名文としての『光明真言上沙勤信記』と、字音直読に基づく音義資料である『新訳華嚴経音義』『貞元華嚴経音義』とに、呉音去声字の上声化に関して質的な差異がないと言う事が出来るかと思う。これらの資料における呉音去声字の上声化に基づいての推定が声調全体に敷衍出来るとすれば、明恵を中心とした高山寺教学において、在家の者が理解できると考えた漢字声調（一般的な漢字使用の場での漢字声調）と、華嚴経直読学における漢字声調（経典字音直読のような学問的な場での漢字声調）とに差異がないと認識していたものと考えられる。

そしてその意識とは、日本語のアクセントとして不自然な声調を避けるというものであつたと考えられる。その意識が、具体的には、一音節字においては、知識声調としては去声に属するものが読誦声調としては単字声調・単語声調ともに上声となるという規則的な規範として現れ、二音節字においては、単語として熟合度の高いものは個々の単語としての声調に従い、単語として熟合度の低いものについては個々の漢字の単字声調に従うという形で現れているものと考えられる。

ここで一つ問題となるのは、知識声調に対する意識があつたのかということである。知識声調とは具体的には声調変化が起こる以前の資料における声点や反切から導き出したものと考えられる。この点については『新訳華嚴経音義』『貞元華嚴経音義』に「倉」（用例35 参考例）がある。これらの例では同じく語頭にある「倉」に同一の反切注がありながら、差声された声点が異なっているのである。この「倉」の例は、声調を求めるために反切は積極的に利用されなかった事を示すものと考えられる。このことから直ちに知識声調に対する意識がなかったということは出来ないが、少なくとも反切を案ずることによって求められる知識声調よりも実際の読誦における声調の方を重視したということは出来よう。

以上述べたことを図にすると（図1）の様になる。

〔図1〕

重 視

二音節字	一音節字	知識声調 (単字)	
		去	上
去		単字	読誦声調
去	上	単語	
去	上	去	上

この図について若干説明を加えるならば、

- 1、知識声調よりも読誦声調を重視する。
- 2、読誦声調としては単字声調よりも単語声調を重視する。
- 3、読誦声調としての単字声調に関しては、音節数と上声・去声との対応関係が規則として把握されていた。
- 4、読誦声調としての単語声調における二音節字の上声・去声の区別に関しては、音韻的規則性についての明確な認識はなく、個々の単語として固定した声調に従う。

というものである。

ここで考え合わされるのは、先に『光明真言土沙勸信記』の字音について考察した際指摘した、字音振仮名の内、唇内入声韻尾の表記に関して、『光明真言土沙勸信記』では一貫してウ表記で声点を差声せず、『新訳華嚴経音義』『貞元華嚴経音義』では一貫してフ表記で入声点を差声するという違いがあるという点である。これは一般的な場と、学問的な

場での漢字音形（声調を除いた部分）に質的差異があると認めている事を示すものと考えられる。

これに対して声調に関しては一般的な場と、学問的な場での声調に質的差異がないと考えていたと思われる。これによれば、高山寺教学においては漢字の音形と声調とでその認識に差異があったという事になる。

その認識の差異が具体的にどのようなものであったかは、次のような指摘から推測される。沼本氏は『新訳華嚴経音義』『貞元華嚴経音義』の片仮名音注について、反切を案じた結果伝承呉音と食い違う形が現れている例を指摘しておられる。

たとえば、「僅<sup>キ</sup>集<sup>キ</sup>鎮<sup>キ</sup>反」「觀<sup>キ</sup>樂<sup>キ</sup>悟<sup>キ</sup>反」（共に呉音は「ゴン」の如き例は、反切下字「鎮」「悟」は漢音でも呉音でも「ㄱ」形となるから、その反切音の結果が漢音形となつてあらわれたものではないかと考えられるのである。この二字の様な場合には「傳承」呉音」の形は反切からは導き出せないのである。

一方声調については、前述の用例「倉」のように、同じ反切注がありながら同じく語頭にある字に異なつた声点が差声されている。これは、声調を求めるために反切は積極的に利用されなかつた事を示すものと考えられる。反切によって漢字の音形・声調を求めるといふことは、当該字の知識としての音形・声調を求める事になる。沼本氏が指摘しておられるように、『新訳華嚴経音義』『貞元華嚴経音義』において反切を案じた結果伝承呉音と食い違う形が片仮名音注に現れているという事は、高山寺教学においては、華嚴経字音直読において漢字の知識としての音形がそのまま用いられ得ると考えていた事を示し、「倉」の例のように同じ反切注がありながら、声点は異なる場合があるのは、華嚴経字音直読において知識としての声調がそのまま用いられない場合がある。言い換えれば具体的な読誦においては声調は変化する場合が多いと考えていたと思われるのである。

## 注

- (1) 覆製として、『明恵上人手訂定稿本(重文) 光明真言土沙勤信記 附 同如來遺跡講式』(勉誠社昭和六十年七月) 翻字として、『大東急記念文庫蔵光明真言土沙勤信記総索引本文篇』(三保忠夫 昭和五十年十月) がある。
- (2) 『明恵上人資料第一(高山寺資料叢書第一冊)』(東京大学出版会 一九七一年三月) に所収
- (3) 『光明真言土沙勤信記の声点について——軽声声点は意図的に差声されたものか——』(鎌倉時代語研究第九輯武蔵野書院 昭和六一年五月)
- 『光明真言土沙勤信記における字音の清濁について——連濁に関する考察を中心として——』(東洋大学短期大学紀要第一九号 昭和六二年一月)
- 『光明真言土沙勤信記の字音について——附 字音振仮名・声点付き漢字分韻表——』(鎌倉時代語研究第十二輯 武蔵野書院 平成元年七月)
- (4) 『高山寺古辞書資料第二(高山寺資料叢書第十二冊)』(東京大学出版会 一九八三年二月) に影印と索引が収められている。
- (5) 注(4)資料の解説
- (6) 『吳音一音節去声字の上声化の過程』(鎌倉時代語研究第十輯 武蔵野書院 昭和六二年五月)
- (7) 『吳音の声調体系の推定』『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』第一部第五章第一節(武蔵野書院 昭和五七年三月)
- (8) 『吳音二音節去声字に対する上声点加点例について』(国文学攷第一一三号 昭和六二年三月)
- (9) 注(3)論文中の『光明真言土沙勤信記の字音について』
- (10) 『高山寺字音資料について』『高山寺典籍文書の研究(高山寺資料叢書 別冊)』(東京大学出版会 一九八〇年一月)
- 〔付記〕 本放は、昭和六二年鎌倉時代語研究会夏期研究集会において口頭で発表したものに、補筆して成稿としたものである。研究集会においては、沼本克明氏より有益な御示唆を頂いた。ここに記して学恩に謝意を表わす次第である。